

## 資料

# 精神看護学実習における実習指導者の指導上の 困難に関する文献検討

A literature review on the difficulties experienced by clinical instructors in psychiatric nursing practice

眞野祥子<sup>1)</sup> Shoko Mano, 吉永愛香<sup>1)</sup> Aika Yoshinaga, 山本智津子<sup>1)</sup> Chizuko Yamamoto

**要 旨** 本研究の目的は、国内の先行研究から精神看護学実習における指導者の指導上の困難の全体像を明らかにし、その困難を軽減する具体策を検討することである。検索の結果20件が抽出され、分析の結果、精神看護学実習における指導者の指導上の困難として、【学校・病院との連携した指導体制の未整備】【病院の実習指導体制の未整備】【指導者自身の問題】【指導に対する達成感の未充足】【患者が学生に及ぼす負担】【実習が患者に及ぼす負担】【実習生としての自覚の欠如】が抽出された。精神看護における看護実践の言語化の難しさによる【指導に対する達成感の未充足】、患者の社会規範から逸脱した行動による【患者が学生に及ぼす負担】は精神看護特有の困難であった。よって、指導者と教員が協働し学生と共に現象の言語化に努めること、学生が患者の逸脱行動に遭遇した時には速やかに報告することの重要性と予防策の教授、患者教育が必要である。

**キーワード** 精神看護、臨床・臨地実習、指導者、困難

## I. 緒言

看護学実習において学生は講義で学んだ知識を基に、患者と相互行為を展開する中で生じた看護現象を教材として、看護実践に必要な基礎的能力の習得を目指す(舟島, 2001)。実習指導者(以下、指導者)は患者のケアへの責任を果たしつつ学生の実習目標達成が求められ、その過程には様々な困難が生じる(篠田他, 2015)。

尾崎(2012)は文献レビューにより、指導者の指導上の不安として【学校に関すること】【学生に関すること】【環境に関すること】【指導に関すること】【人間関係に関すること】を抽出し、これらの困難への支援策を論じた。細田ら(2004)は、指導上の困難は「実習指導者自身の力量」「学生との心理的距離」「学習環境・学習内容」「学生以外の対人関係」の4因子構造で、その影響要因を明らかにした。

精神看護学実習は学生にとって初めて精神障害者

と接する機会となる場合が多く、対象理解や看護実践の可視化の難しさもあり、他領域の実習と比較して不安や緊張が高い(小阪他, 2010)。よって、指導者は不安や緊張の高い学生に学びを促進できるよう教育的な関わりが求められより困難を感じる事が推測される。

精神看護学における指導者の指導上の困難として、教育理念や方針の違い、学生の態度や反応、病院の実習指導体制、指導者の指導方法等の困難とその対処法が述べられている(手塚他, 2018; 森田他, 2012; 江原他, 2005; 男鹿, 2008; 出口他, 2006; 福井他, 2005; 中村他, 2012a)。しかしこれらの対処法は、教育機関との連携や指導体制の整備の必要性が端的に述べられているにとどまり、指導者への支援策が十分に検討されているとはいえない。学生の学習の質保証のためには困難の全体像を把握し、困難軽減のための具体策を検討する必要がある。そこで本研究の目的は、国内の先行研究から精神看護

1) 摂南大学看護学部看護学科 Faculty of nursing, Setsunan University

学実習における指導者の指導上の困難の全体像を把握し、その困難を軽減する具体的な方策を検討することとする。

## II. 方法

### 1. 文献検索と対象文献の選定方法

医学中央雑誌Web版 (Ver.5) (以下、医中誌)にて、発行年を指定せず (1959年以前~2019年) 検索した (2019年7月31日)。キーワードは「精神看護」「臨床・臨地実習」「指導者」をかけた検索した。次にCiNiiで、「実習」「精神」「看護」と「指導者」をかけた検索 (CiNiiの検索結果①)、「指導者」に関連する語群「助手」と「実習」「精神」「看護」をかけた検索 (CiNiiの検索結果②) し、同様に「看護師」「実習」「精神」「看護」をかけた検索 (CiNiiの検索結果③) した。

論文の採択フローチャートを図1に示す。研究目的に照らし、①テーマに該当する記載がタイトル・抄録から判別不可②研究目的・方法・結果・考察に相当する記載がない③結果でテーマに該当する内容の記載がない、の3つを除外条件とした。図1に示すように、それぞれの検索結果を除外条件①~③に照らし、対象文献20件を抽出した。

### 2. 分析方法

#### 1) 対象文献の概要整理

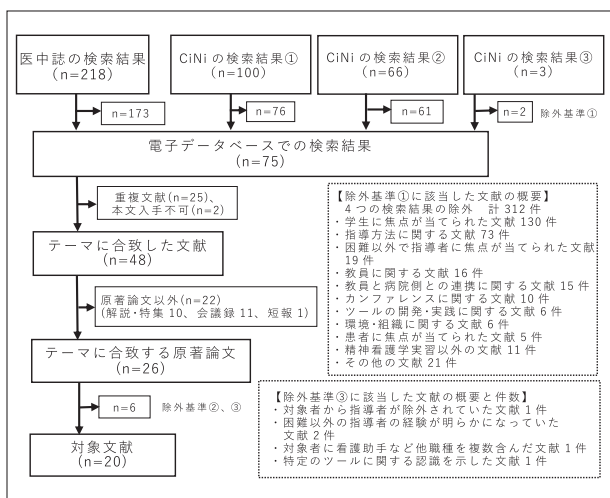


図1 論文の採択フローチャート

選定した20文献を精読し、文献ごとに論文タイトル、発行年、研究目的、研究方法、結果を抽出し、指導者の指導上の困難に関する概要を整理した。

### 2) 指導者の指導上の困難の内容分析

抽出した困難の論旨を損なわないよう内容をコード化し、生成したコードの類似性・相違性を考えて、サブカテゴリー、カテゴリーを生成した。妥当性確保のため、質的研究の経験のある複数の研究者で分析し、その結果を質的研究に精通した精神看護学の教員および指導者に適切であるかの確認を依頼した。

### 3. 用語の操作的定義

困難：先行研究 (小澤他, 2015; 尾崎, 2012) による定義と広辞苑を参考に、本研究では「指導者が実習中にその役割を遂行したり、指導する上で苦しみ悩むこと、難しいと感じていること、困っていること、戸惑い、不安」と操作的に定義する。

## III. 結果

20文献の発行年次と文献数は、1998年~2003年2件、2004年~2008年6件、2009年~2013年5件、2014年~2018年7件であった。全て精神看護学が成人看護学から独立した1997年以降に発行されていた。看護学校の実習の指導者を対象とした研究 (文献No.20) を筆頭に、短大 (No.19)、専門学校 (No.18)、2005年に初めて大学に焦点が当てられていた (No.17)。この発行年次は1990年代後半から看護系大学が急増し、当初の入学生が実習を履修する時期とほぼ一致していた。

研究の種類は量的研究4件、質的研究12件、質量併用研究3件、文献検討1件であった。データ収集はインタビューが最も多く8件、自作の質問紙7件、学生のプロセスレコードの分析3件、先行研究から指導者の認識を抽出したもの1件、指導者の不安の関連要因を統計学的に検討したもの1件であった。

### 1. 対象文献の概要

対象文献の概要を表1に示す。質的に困難の内容を明らかにした研究 (No.1, 5, 8, 10, 11, 14, 15, 16, 17, 18) が最も多く、次項に示すようにその内容は

表1 精神看護学実習における指導者の指導上の困難に関する文献一覧

| No. | 著者(発行年)<br>タイトル  | 研究目的   | 研究方法<br>(①研究対象 ②データ収集③分析方法)  | テーマに関連する結果の概要  |
|-----|--|--|--|--|
| 1   | 手塚祐美子,清水健史,伊藤治幸(2018)<br>「新規に精神看護学実習を受け入れた病院の実習指導者の指導体験」   | 新規に実習を受け入れた病院で、指導者がどのように実習指導を体験したのかを明らかにする   | ①新規に実習を受け入れたA病院の3病棟の内、2010年～2013年の間に指導者を経験した6名<br>②半構造化面接③KJ法  | 【効果的な指導ができず力不足を感じる】《精神科の良いイメージや特殊性をうまく伝えられず困る》《自分の指導が学生に伝わらず落ち込む》等の困難が示された。  |
| 2   | 乙黒仁美,藤村弥生(2015)<br>「患者の包布交換指導と患者使役の差異を学生が理解できなかった要因」   | ①包布交換のアセスメント場面での新人実習助手の戸惑いの実態を明らかにする<br>②戸惑いの実態からその要因を明らかにする<br>③戸惑いを軽減するための示唆を得る                | ①筆者の1人新人実習助手②指導で戸惑いを生じた場面のプロセスレコード③質的帰納的に分析、事象を分類し、時系列に沿って整理、学生への対応にテーマをつけ、指導者の意図を明確にし、全体分析                                  | 指導者は学生の計画に驚きを感じ、学生の理解度が分らならず、不安が増強し、どういえば良いか悩んだり、混乱・不安で胸が高鳴るなどの身体反応が出現した。その結果、学生指導不能で困っていた。指導者の戸惑いは、学生の学修不足により生じていた。   |
| 3   | 渡邊碧,小高恵美,原田尚子(2017)<br>「精神看護学実習における実習指導者および教員の認識と教育的支援に関する文献検討」                                    | 国内研究から指導者及び教員の認識と教育的支援の内容を明らかにし、効果的な実習に必要な今後の研究や指導の在り方を検討  | ①条件等で該当した29件の文献②医中誌で国内文献の検索③題名・発表年・研究方法・記述された結果を内容と教育的支援提供者によって分類  | 指導者の困難に関する6文献では、困難は学生との関係、教員との協働、指導者自身等多岐に渡っていた。指導者になることへ抵抗感があり、多くの業務で不満足は持続していた。教員との連携不足を指摘。  |
| 4   | 佐藤美保,横山祐輝,北澤典子,岡田昌也,吉田信子,田野野尊,浅沼奈美(2016)<br>「精神看護学実習における実習指導者と教員の連携による実習指導:患者-学生-指導者-教員の相互関係の分析から」 | 患者-学生関係に問題を抱えた3事例を通して、指導者と教員の思い、双方が行った指導内容、感情を想起し、実習中の学生-学生-指導者-教員の関係性を力動的に捉え、4者間で起きていることを明らかにする | ①患者-学生関係に問題を抱え、指導者と教員が困惑を感じた3事例の学生の実習記録②実習記録から事例を再構成③事例を指導者と教員で分類、思い・考え・感情についても互いに話し合い、検討を繰り返す<br>④患者-学生-指導者-教員の4者間の関係性を理解する | 事例1:指導が順調にいかず、困った学生と悩み、不満足や焦りがあった。事例2:実習継続に迷いがあった。4者間で葛藤が伝わらず、病棟看護師も含む互いの葛藤が助長する悪循環の構造となつた。事例3:学生が患者に思いを伝えられず、関係を深められず焦っていた。困難は、患者、指導者、教員の学生への過剰な期待が大きいために起きていた。                   |
| 5   | 畑山雅宏(2016)<br>「精神看護学実習における新人臨床実習指導者の指導の実態」   | 精神科に3年以上勤務し、指導経験3年未満の新人指導者に焦点を当て、学生への指導内容の実態を明らかにする  | ①A病院精神科の新人指導者6名②半構造化面接③コード化、サブカテゴリ・カテゴリを生成、カテゴリで関連図、全体論で上位カテゴリでストーリーラインを構築   | 【指導への姿勢・考え】:<限られた時間の中での指導><指導に対する考え方の相違><指導を展開していく上で不安>、【実習環境の整備・調整】:<教員との雑居環境での連携困難>等の困難が示されていた。  |
| 6   | 梅原敏行,田上博喜,白石裕子,藤木翔,猪山理隆,友安美章,森岡由子,門田百合子,宮本奈美子,木村幸生,辻紋子(2013)<br>「精神看護学実習の指導の方法について」                | 精神科訪問看護ステーションにおける看護学生の臨床実習の受け入れ状況と、実習がもたらす精神科訪問看護ステーションへの影響について調査する                              | ①精神科訪問看護ステーション176事業所の管理者及び指導者の内、精神科の専属者②無記名自記式質問紙③単集計、カイニ乗検定、自由記述からサブカテゴリを抽出、サブカテゴリからカテゴリを作成                                 | 《人・時間・お金に対する負担が大きい》、【利用者にかかる負担】:《利用者を受け入れてもらえない》《実習環境の悪化を招く》、【学生が引き起こす問題】:《学生のマナーにストレスを感じる》《情報漏えいのリスク》という困難が示された。  |
| 7   | 乙黒仁美,藤村弥生(2014)<br>「学生への患者疾病特性行動理解の期待が伝わらず混乱に陥った指導者」   | ①学生への患者理解の指導が伝わらず戸惑った場面の実態を明らかにする<br>②戸惑いの要因を明らかにする<br>③戸惑いを軽減するための示唆を得る                         | ①戸惑いを感じた実習助手②戸惑いを感じた看護学生1名の2場面を再構成③質的帰納的に分析、事象を分類し、時系列に沿って整理、カテゴリ化し、各カテゴリにテーマをつけ、テーマ間の関連性を分析表記                               | <看護師の助言を受けても分からない><学生の視点で理解できない>等の混乱が生じていた。学生の言動で生じた異感と対峙せず、学生の学びを明確化出来ず、アセスメントも認められず、自己概念の揺らぎが生じた。学生と向き合えない要因は知識不足による不安であった。  |
| 8   | 井上誠,近藤美也子,森岡佳隆,井上雄二,西原和隆,友安美章,森岡由子,門田百合子,宮本奈美子,木村幸生,辻紋子(2013)<br>「精神看護学実習の指導の方法について」               | 実習指導要綱の作成にあたり、実習指導者の考えや困難さを明らかにし、精神看護学実習のあり方について検討する   | ①学生に直接的、間接的に関わっている指導者12名②独自に作成したアンケート(4段階の尺度、自由記述)③4段階の尺度は点数化、自由記述はカテゴリ化   | やりにくさの有無の平均は4点中2.57点。学生や教員への困難感の有無の平均は4点中2.75点。困難として【教員側に関する問題】<br>【指導者側に関する問題】<br>【学生側に関する問題】の3カテゴリが抽出され、困難は《セクシャルハラスメントに関しての認識の甘さ》等が示された。  |
| 9   | 乙黒仁美,藤村弥生(2013)<br>「看護学生役割克服から学生としての看護師役割克服を助ける臨床実習指導の本質 精神看護学実習指導における新人実習助手の戸惑いから」                | ①指導者が戸惑いを感じた場面の実態を明らかにする<br>②戸惑いの要因を明らかにする<br>③戸惑いを軽減するための示唆を得る                                  | ①指導者が戸惑いを感じた看護学生12名②戸惑いを生じた場面のプロセスレコード③質的帰納的に分析、事象を分類し、時系列に沿って整理、事象の本質をカテゴリ化し、各カテゴリにテーマをつけ、指導者の意図を明確にし、テーマ間の関連性を分析表記         | 《指導者の学生への期待》に対し、学生は期待に応えられなかった。その結果指導者は戸惑いを感じ、《学生指導力への不安》に発展した。このように指導者の思いには順序性があつた。   |
| 10  | 中村博文,渡辺尚子(2012a)<br>「精神科における臨床実習指導者の不安・困難についての分析」  | 指導者が指導にどのような不安・困難を抱えているのかを構造的に分析し明らかにすることで、より効果的な指導と、指導者へのサポートのあり方に示唆を得る                         | ①指導者研修会参加の看護師108名②質問紙調査③文節～段落ごとに吟味し、頻表に現れる言葉、現象等に注目しコード化、類似・適合するものをカテゴリ化、共起関連図を作成、共起関連図のデータ分析にSPSS使用                         | 有効回答率76.0%。【学生との関係】<br>【自己の指導力】<br>【指導者への支援体制】<br>【実習記録】<br>【精神科の特殊性】<br>【学校との調整】<br>【患者との関係】の7カテゴリが示され、《教員のスキルがわからない》<br>《精神科の特性の理解》等が示された。                                       |
| 11  | 森田望,武川百子,志波元,榎本真次,小谷智美,南村涼子,中川奈緒,志屋久美(2012)<br>「精神看護実習における指導上の困難」                                  | 精神看護の指導者を対象に、これまでの研究でまだ明らかとなっていない指導上の困難さを抽出することを試み、指導のための試料とする                                   | ①総合病院精神科の指導者4名②個別インタビュー<br>③グループインタビュー④ラベルをつき、ラベルを比較し同様の現象のラベルをまとめてカテゴリに分類、分類したカテゴリを妥当性を確かめながらカテゴリを精選                        | 個別インタビューでは【実習指導者役割の不明瞭さ】<br>【精神看護特有の実習指導の困難】等の8カテゴリ、グループインタビューでは【精神疾患患者の症状のとりえ難さ】<br>【言語化し難い看護ケアを指導する難しさ】<br>【看護ケアの効果がみえにくい】等の5カテゴリが示された。  |
| 12  | 中村博文,渡辺尚子(2012b)<br>「精神科における臨床実習指導者の不安と自己評価に影響する要因の分析」   | 精神科における指導者の不安と自己評価に影響を及ぼす要因を構造的に捉え、今後の指導者に対する支援のあり方に示唆を得る  | ②泉の精神科指導者研修会参加者の看護師108名②STAI日本語版、自尊感情尺度、自己効力感尺度、看護学実習教授活動自己評価尺度③各尺度の相関係数を算出、重回帰分析、分散構造分析で適合度を検討                              | 指導者の不安には、自己効力感・自尊感情・性別が不安に影響し、自己評価には、自己効力感・自尊感情・指導者経験年数・看護師経験年数が自己評価に影響していた。これらから指導経験を活かし自己効力感や自尊感情を高めるため研修会や環境整備の必要であると指摘した。  |
| 13  | 東中須恵子,神郡博(2007)<br>「精神看護学実習が臨床実習指導者に及ぼす影響 K病棟の指導者の意識から」  | 単科精神病院における指導者への意識調査から、指導者の実習の取り組み方を知り、教員との連携のための課題を明らかにする  | ①K精神科病院臨床実習指導者6名<br>②アンケート(二者択一または5段階評価)<br>③単集計   | 知識・経験・指導力の不安の平均点が5点満点中4.0点で最も高い。「できるだけ教員も実習に関わってほしい」「実習で受け持つ患者の選定が難しい」等の平均点は3点を越えた。  |
| 14  | 男鹿麻里子(2008)<br>「新人臨床実習指導者のサポートシステムの必要性を考える 精神看護学実習における新人臨床実習指導者が抱える困難」                             | 新人臨床実習指導者の困難を明らかにすることで、新人臨床実習指導者に対する効果的なサポートシステムを考える   | ①指導者研修会未受講、かつ実習指導に携わっている精神科病院の新人臨床実習指導者5名<br>②半構造化面接③KJ法   | 新人の困難の要因は《やらされ感の実習指導》《実習指導に対する関心が低い》《自分の力量に関する自信のなさ》《自分の指導に対する達成感がない》《何を教えてもらえた実感がない》等を含む2カテゴリが示された。   |
| 15  | 江原真紀,澄川幸恵,鈴木利枝(2006)<br>「教育理念や方針の違いによる実習指導者の戸惑い・困難」  | 各学校理念や方針の違いにより指導者が抱える戸惑いや指導上の困難な点を具体的に明らかにする   | ①都内精神病院に勤務3年以上指導経験のある指導者10名②半構造化面接③逐語録を作成し、テーマによる混乱【負担となる役割】の4カテゴリに分類  | 教育理念や方針の違いによる困難として【学校方針や理念の違いから生じる戸惑い】<br>【不十分な看護理論の把握】<br>【到達レベルの違いによる混乱】が抽出された。  |
| 16  | 出口祐子,松本佳子,武井麻子(2006)<br>「学習環境としての治療施設の現状:指導者の役割に焦点を当てて(その2)」                                       | 指導者の役割に焦点を当て、指導上の葛藤・課題、手ごたえ等を明らかにし、教育機関との望ましい連携について検討する  | ①関東圏にある精神科病院の看護師で、実習指導に携わる者5名②個別インタビュー・グループインタビュー③逐語録を作成し、内容をエピソードごとにとりまとめ、5つのマを抽出して分類しコード化                                  | 困難として《多様な背景を持つ学生への対応の難しさ》<br>《今どきの学生の行動に対する戸惑い》、<br>【実習指導への不安と葛藤】:<br>《指導者になることへの準備とサポートの不足》<br>《教員と学生の間で葛藤する指導者》等が示された。   |
| 17  | 福井美貴,末安民生,野末聖香(2005)<br>「精神看護学実習における実習指導者の抱える困難 大学教育に焦点を当てて」                                       | 大学教育において効果的で質の高い実習を実施するために、指導者の教育上の困難を明らかにし、有効な実習方法及び臨床実習指導者との連携方法を検討する                          | ①複数の短大・大学の実習を受入れる3精神科病院の指導者128名②アンケート(択一式質問または自由記述式質問)③択一式質問は単集計、自由記述は帰納的に分類し、コード化、カテゴリ化                                     | 【学校教員に関する困難】<br>【学生に関する困難】<br>【患者に関する困難】<br>【病院の実習指導体制に関する困難】<br>【臨床実習指導者自身に関する困難】:<br>《学歴職歴の点で指導に自信がない》<br>《病棟管理や設備に関する困難》の6カテゴリが抽出された。   |
| 18  | 佐藤好子,佐川朋美,後藤江子,鮎田政也,矢澤香代子,小川三佳,古谷谷子,横井みず子,岡野千代,茂田菜月(2004)<br>「精神看護学実習に対する臨床実習指導者の意識」               | ①精神看護学実習における指導者の指導への意識と実態を明らかにする<br>②①をもとに実習指導における指導者と教員の連携上の課題を考察する                             | ①県内の看護専門学校校の精神看護学実習病院10施設の指導者128名②アンケート(択一式質問または自由記述式質問)③択一式質問は単集計、自由記述は帰納的に分類し、コード化、カテゴリ化                                   | 【学生のかわかりが患者に及ぼす影響】<br>【患者の症状が学生に与える影響】:<br>《患者への対応の意見のズレ》、<br>【指導者としての能力不足】:<br>《学生のレイタンスの把握の不十分さ》等の不安、<br>【対象理解の困難性】<br>【指導方法上の困難性】:<br>《ロールモデルができない》、<br>【実習環境・指導体制】等のジェンマが示された。 |
| 19  | 熊地美枝,菊池謙一郎(2000)<br>「初めて看護学生実習を受け入れた精神科病棟看護スタッフの学生や実習に関する意識について」                                   | 初めて実習を受入れた病棟の看護スタッフの、学生が実習に入ることや実習への抵抗感及び意識の変化の有無等を知り、臨床側の実習受入の状況を明らかにする                         | ①S市の総合病院の中にある実習を初めて受け入れた精神科の男子と女子の開放閉鎖2病棟の看護スタッフ48名②独自に作成した質問紙<br>③単集計   | 回答数24人。学生の印象として「頑わしき」3人、「奇立ち」2人があると回答。実習への抵抗感12人、6人が実習後に抵抗感が変化した。抵抗感の内容が「学生に指導できるかという不安」が9人と最も多く、「自分の看護を評価されるという恐れ」等11人が回答。  |
| 20  | 小泉順子,掲野裕紀子(1998)<br>「精神看護臨床実習指導に関する現状と課題」  | 指導者に対するアンケート調査から指導者の実習指導に対する意識を明らかにし、精神看護実習の現状と課題を把握する   | ①岡山県内で看護学校2年・3年過程の精神科看護臨床実習を受け入れている11施設の実習指導者100名②既製の調査用紙の内容を参考に作成した質問紙③記述統計   | 非常にそう思う/どちらかといえばそう思うと回答した者の自分の業務が困難、指導方法の不安、看護モデルに自信なしは95%以上、業務のため時間不足、記録の点検が負担、個別指導が困難等は約80%が回答。  |

多岐に渡っていた。2文献 (No.10, 11) では精神看護特有の困難を抽出し、指導者は精神科の特殊性の

教授に苦慮し (No.10)、言語化し難いケアの指導の難しさといった困難を明らかにした (No.11)。また、

**表2 精神看護学実習における実習指導者の指導上の困難**

| カテゴリー               | サブカテゴリー                              | コード  |
|---------------------|--------------------------------------|--|
| 学校・病院との連携した指導体制の未整備 | 教員とのコミュニケーションの不足                     | 教員が実習に来ない<br>教員の性格が個性的<br>学校の教育方針を理解できない<br>学生患者間トラブルへの対応を丸投げされる<br>教員が学生につきっきり<br>実習目標・実習内容に同意できない<br>授業内容が把握できない   |
|                     | 複数の学校を受け入れることへの混乱                    | 各学校の実習目的・記録様式が異なる<br>専門学校と大学の違い<br>指導者の役割が学校によって異なる  |
|                     | 教員の臨床経験不足<br>指導者専任ではないこと<br>による時間の不足 | 教員に精神科経験が無い<br>業務が滞る<br>記録を見る時間がない<br>学生と関わる時間に制限がある   |
| 病院の実習指導体制の未整備       | 病棟の実習指導体制の未整備                        | 実習指導を考慮したシフトが組まれていない<br>指導者が少なく負担が大きい<br>指導者が複数のため連携が困難<br>病棟毎、時期毎に指導体制が違う<br>病院から提供される実習指導についての学習の機会が不十分<br>指導者の役割が曖昧   |
|                     | 同僚からの実習に対する理解不足                      | 他のスタッフから学生に関して批判される<br>業務にかかわる時間が減り、批判される<br>多忙で他のスタッフから孤立する<br>指導者同士の考え方の不一致<br>病棟全スタッフからは協力が得られない<br>病棟が実習指導に対して無関心<br>学生が立案する看護計画継続は困難  |
|                     | 病院の実習施設としての不備                        | 実習に適した施設が<br>カンファレンスの環境が悪い<br>病棟内に学生の居場所がない<br>やらされ感覚の実習指導   |
| 指導者自身の問題            | 指導者としての自覚の欠如                         | 実習指導に対する関心低い   |
|                     | 指導者としての自信のなさ                         | カンファレンスでのコメントに自信がない<br>内容の伝え方が分からない<br>考えさせる指導の仕方が難しい<br>実習記録へのコメントができていないのか<br>実習目標に添えているか<br>実習の評価<br>質問や問題に対する指導ができない<br>学生の臨床経験の有無による違いがあるため指導の仕方が難しい<br>学生からのフィードバックがないことに対する不安全感<br>指導者役割が苦手<br>学歴職歴の点で指導に自信がない<br>大学生への指導という構え<br>自分の受けた教育内容と違うことによる戸惑い<br>自分の看護を評価されるという恐れ |
|                     | 看護実践への自信のなさ                          | ロールモデルができない<br>患者-看護師関係深化のための方法が分からない<br>精神看護に関する経験不足<br>精神看護に関する知識不足  |
| 指導に対する達成感の未充足       | 看護実践を学生に伝えにくい                        | 精神科の良いイメージや特殊性をうまく伝えられず困る<br>患者との関わりは単一ではないため単独で指導することは悩む<br>直接的な日常生活援助が少ない<br>看護ケアの意図が見えにくい<br>看護ケアの成果がみえにくい<br>精神疾患患者の症状のとらえの難しさ<br>病識のない患者への看護ケアの指導<br>言語化しがたい看護ケアを指導する難しさ  |
|                     | 学生との看護実践のズレ                          | 学生への患者に対する目標設定が不適切<br>患者への対応に関する意見のズレ  |
|                     | 実習期間が短い<br>学生数の多さ                    | 実習期間が短かすぎる<br>学生が多く、指導が分散する  |
| 患者が学生に及ぼす負担         | 患者による学生への負の影響                        | 学生に対する恋愛感情<br>学生へのセクシャルハラスメント<br>男性患者の性的行為<br>症状による衝動行為<br>学生を拒否する<br>患者に巻き込まれる  |
| 実習が患者に及ぼす負担         | 患者選定が困難                              | 実習効果や悪影響を考えた選定が困難<br>学校の選定基準を満たす患者数の不足<br>実習途中の患者変更<br>患者の受け持ち了承の困難  |
|                     | 実習による患者への負の影響                        | 患者の疲労・ストレス<br>患者の症状悪化<br>個人情報漏洩リスク<br>患者からの苦情  |
|                     | 学生の学習時間の不足                           | 事前学習不足<br>実習中の学習不足   |
| 実習生としての自覚の欠如        | 学生の態度が悪い                             | 態度・礼儀作法が悪い<br>学生からの現場への批判的発言への対応が難しい<br>実習終了後も患者と接触する<br>患者のところにいけなくなる<br>患者への偏見によって患者と関わることを躊躇する<br>患者に関心が持てない<br>精神科を馬鹿にした態度<br>自己評価が不適切に高い  |
|                     | 学生の反応が乏しい                            | 意思表示のなさ<br>学生の気質が分からない<br>学生とのコミュニケーションとりにくい   |

大学教育 (No.17) 等、特定の視点に着目した研究 (No.1, 5, 14, 15, 18, 19) も散見され、いずれも教員との連携や病棟からの指導者へのサポートの必要性を述べていた。一方、指導者は教員との協働に困難を覚えていることが報告されていた (No.3)。訪問看護ステーション対象の研究 (No.6) では、指導者の時間・人的負担、利用者の選定困難、情報漏洩等のトラブルの懸念があることが報告されていた。

中村ら (2012b) は、既存の尺度を用いた質問紙調査で指導者の不安の要因を分析し、自己効力感と自尊感情が関与することを共分散構造分析で示した。乙黒ら (2015; 2014; 2013) は、実習記録から指導者の戸惑いの要因を分析し、学生の学修不足、指導者の学生への期待が要因であると指摘した。佐藤ら (2016) は、実習記録から患者-学生-指導者-教員の関係性を分析し、指導者は指導がうまくいかず、困った学生と悩み、その不安全感が病棟全体に影響することを報告した。

量的研究では、研修未受講の指導者は指導への不安を常に抱え (No.13)、95%以上の指導者が業務への負担、指導方法の不安を感じていることが明らかになった (No.20)。井上ら (2013) は独自の質問紙で、実習のやりにくさの程度の平均点は4点中2.57点であり、指導者が指導のやりにくさを感じていることを明らかにした。

## 2. 精神看護学実習における指導者の指導上の困難

分析の結果、指導者の指導上の困難として、7カテゴリおよび20サブカテゴリが抽出された。なお、カテゴリは【 】、サブカテゴリは《 》、コードは〈 〉で示す。カテゴリ、サブカテゴリ、コードを表2に示す。

1) 【学校・病院との連携した指導体制の未整備】：指導者は〈教員が実習に来ない〉等の《教員とのコミュニケーションの不足》に困り、専門学校や大学の実習を受け入れる病院では《複数の学校を受け入れることへの混乱》が生じていた。

2) 【病院の実習指導体制の未整備】：指導者は病棟業務との兼任のため、《指導者専任ではないことによる時間の不足》や〈病棟が実習指導に対して無関

心〉である場合等《同僚からの実習に対する理解不足》に悩んでいた。

3) 【指導者自身の問題】：指導者は管理職から学生指導を任命され、〈やらされ感覚の実習指導〉が負担になると共に、《指導者としての自信のなさ》を感じていた。

4) 【指導に対する達成感の未充足】：指導者は精神科における《看護実践を学生に伝えるに》と感じ、《学生との看護実践のズレ》を認識していた。その他に《実習期間が短い》《学生数の多さ》に困り、十分に指導できていないと感じていた。

5) 【患者が学生に及ぼす負担】：指導者は、患者の精神症状や社会規範から逸脱した行為による《患者による学生への負の影響》を危惧していた。

6) 【実習が患者に及ぼす負担】：指導者は《患者選定が困難》なだけでなく、《実習による患者への負の影響》を心配していた。

7) 【実習生としての自覚の欠如】：指導者は学生に対し、《学生の態度が悪い》《学生の反応が乏しい》と感じていた。

## IV. 考察

本研究では精神看護学実習における指導者の指導上の困難として、表2に示した7カテゴリを抽出した。尾崎 (2012) を初めとする他領域の指導上の困難に関する研究と比較すると、本研究では【指導に対する達成感の未充足】【患者が学生に及ぼす負担】が新たに抽出され、それ以外は他領域の指導者と同様の困難を抱えていることが明らかとなった。

### 1. 他領域と共通する指導者の指導上の困難とその対処

指導者は、《複数の学校を受け入れることへの混乱》や《教員とのコミュニケーションの不足》を感じていた。指導者と教員が共通認識のもとに実習指導するには両者の連携・協働が必要で、そのためにはコミュニケーションが重要である (原田, 2003)。よって、教員は実習現場に可能な限り赴く、又は連絡先を伝え常に指導者と連絡が取れるよう体制を整

える。また、授業内容や実習目的・方法を伝達できる時間の確保、両者が自由に意見交換できる関係性構築が必要である。

指導者は《同僚からの実習に対する理解不足》を感じ、同僚から協力が得にくいことが推察される。よって、指導者の増員と専任化、時間的余裕の確保、全スタッフへ指導者役割を周知し理解を求めていく必要がある。

指導者は、《指導者としての自信のなさ》や《看護実践への自信のなさ》を感じていた。指導者研修を受講し、看護職としての経験年数、職位、実習指導の経験年数が高い指導者ほど自身の力量に関する困難を認識しにくい（細田他, 2004）。よって、指導者任命の際には研修受講の有無や経験年数等を考慮する必要がある。また、指導者の指導に対して教員や学生からのフィードバックも必要であろう。

実習が患者に負の影響を及ぼす要因として、患者の立場に立った看護が実践できないことが考えられる。相手の立場に立った看護実践のためには共感性を高める必要があり、対人援助職の共感性向上のためのプログラムも開発されている（西村他, 2015）。よって、【実習が患者に及ぼす負担】に関する困難対処に、授業で共感性向上のためのプログラム実施も有効であろう。指導者の責務として患者の保護があり、そのためには、指導者と患者・学生間の良好な関係性を築き（中村他, 2012a）、患者-学生間の関係性の調整が必要である。よって、教員と指導者が指導を適切に分担しながら実習の進捗状況を把握・共有し、患者-学生間の関係性の調整を図る必要がある。

指導者は、【実習生としての自覚の欠如】に対して困難を感じていた。実習の場は学生にとって初めての体験や出会いがあり、学内とは異なる環境であるため学生の緊張度も高く、持っている力や思いを表出することが難しい（高木, 2000）。よって、学生の心理的特徴把握のため教員と指導者は学生とコミュニケーションを図り、学生の実習以外の場面の特徴を知っている教員と指導者間で情報交換し、特徴をふまえた指導が必要である。指導上の困難は、

指導者や教員が学生に期待をするために起こる（佐藤他, 2004）。よって、学生は既習の知識・技術を知っていて当然とせず、初学者として接することが必要である。

## 2. 精神看護特有の指導上の困難とその対処

精神看護の対象は視覚的に確認できない人間の精神的な側面であり、看護実践やその効果も言語化して人に説明することは難しい。また、同じ疾患であっても患者の生い立ち、精神症状とその重症度、疾患の経過は一樣ではなく、看護師はその場で状態を判断し看護を実践する。精神科における熟練した看護技術は、自分で経験を積み重ねて技として蓄えてきた人が多い（濱田, 2007）。本研究で抽出された《看護実践を学生に伝えにくい》背景には、この技をどう言語化して相手に伝えるかの難しさがあることが考えられる。看護実践が学生にうまく伝わらないため、《学生との看護実践のズレ》が生じ、その難しさゆえに実習期間や学生数に関する困難を感じ、指導に対する達成感が未充足であることが考えられる。山下ら（2015）は学生の実習時の問題として、遭遇した現象やそれに対する意見を適切に言語化できないことを指摘している。指導者、学生ともに看護技術を実践した意図を明確にし、看護実践を含む現象や実践への省察を丁寧に言語化する試みが必要である。そこで、学生においては授業の時から現象の言語化を意識できるようにする。そして実習では臨床に精通した指導者と学生のレディネスを一番把握している教員が協働し、学生と共に現象の言語化に努めなければならない。

精神科病棟の患者は精神状態により適切な判断ができず、社会規範から逸脱した行動をとることがある。患者の逸脱行動に学生が遭遇した場合、患者との関係性悪化を恐れ報告・相談を躊躇し、問題解決が遅れることは珍しくない。よって【患者が学生に及ぼす負担】に関する困難対処のため、学生には気になることがある場合、速やかに指導者・教員に報告することの重要性の理解を促す。問題が起こった場合、指導者・教員は学生の思いを聴き、逸脱行動を起こした患者の背景を伝えることも必要である。

また、こうした出来事を未然に防ぐために事前オリエンテーションで逸脱行為のある患者情報を学生に提供し、助けを呼ぶ方法、部屋に近づかない、話す時の位置に気をつける等の予防法を伝え、患者教育としては「暴力・セクハラ行為は犯罪である」との認識を促す必要がある(三木他, 2010)。

### 3. 本研究の限界

指導者に関して、指導者・看護師・精神科看護師としての経験年数や教育背景、指導者の所属する病院が総合病院の精神科病棟か、あるいは単科精神科病院であるかによって指導上の困難に相違があるかは検討していない。実習生の学年・所属する学校の種類も同様である。今後は指導者や学生の属性によって指導上の困難に相違があるのかを検討する必要がある。

## V. 結語

精神看護学実習における指導者の指導上の困難として、【学校・病院との連携した指導体制の未整備】【病院の実習指導体制の未整備】【指導者自身の問題】【指導に対する達成感の未充足】【患者が学生に及ぼす負担】【実習が患者に及ぼす負担】【実習生としての自覚の欠如】が抽出された。【指導に対する達成感の未充足】【患者が学生に及ぼす負担】は精神看護特有の困難であった。精神看護特有の困難への対処として、指導者と教員が協働し学生と共に現象の言語化に努め、学生が患者の逸脱行動を回避できる方策を取る必要がある。

## 文献

出口禎子, 松本佳子, 武井麻子 (2006): 学習環境としての治療施設の現状: 指導者の役割に焦点を当てて (その2). 日本精神保健看護学会誌, 15 (1), 58-66.

江原真紀, 澄川幸恵, 鈴木利枝 (2005): 教育理念や方針の違いによる実習指導者の戸惑い・困難 精神医学研究所業績集, 42, 97-99.

福井美貴, 末安民生, 野末聖香 (2005): 精神看護学における臨床実習指導者の抱える困難 大学教育に焦点を当てて. 日本精神保健看護学会誌, 14 (1), 88-97.

舟島なをみ (2001): 看護教育学研究の成果に見る看護学実習の現状と課題. Quality Nursing, 7 (3), 6-14.

濱田淳子 (2007): 地域で暮らす精神障害者に対して用いられる熟練看護師の技. 日本精神保健看護学会誌, 16 (1), 40-48.

原田広枝 (2003): 臨地実習における「看護学校と実践の場」の連携に関する研究: コミュニケーションと対等性の検討. 教育経営学研究紀要, 6, 39-46.

東中須恵子, 神郡博 (2007): 精神看護学実習が臨地実習指導者に及ぼす影響 K病院の指導者の意識から. 弘前学院大学看護紀要, 2, 41-48.

細田泰子, 山口明子 (2004): 実習指導者の看護学実習における指導上の困難とその関連要因. 日本看護研究学会誌, 27 (2), 67-75.

井上誠, 近藤美也子, 森岡佳隆, 井上雄二, 西原和隆, 友安英喜, 森岡美由子, 門田百合子, 宮本奈美子, 木村幸生, 辻紋子 (2013): 精神看護学実習の指導の方法について. 日本精神科看護学術集会誌, 56 (2), 142-146.

帰山雅宏 (2016): 精神看護学実習における新人臨地実習指導者の指導の実態. 日本精神保健看護学会誌, 25 (1), 76-83.

小阪やす子, 文鐘聲 (2010): 精神看護学実習における看護学生の心理的ストレス. 太成学院大学紀要, 12, 171-176.

小柴順子, 揚野裕紀子 (1998): 精神看護臨床実習指導に関する現状と課題. 川崎医療福祉学会誌, 8 (2), 311-317.

熊地美枝, 菊池謙一郎 (2000): 初めて看護学生実習を受け入れる精神科病棟看護スタッフの学生や実習に関する意識について. 自治医科大学看護短期大学紀要, 8, 89-96.

森田望, 武用百子, 志波充, 榎本真次, 小谷智美,

- 南村涼子, 中川奈甫, 古屋敷久美 (2012): 精神看護実習における指導上の困難. 和歌山県立医科大学保健看護学部紀要, 8, 43-51.
- 三木明子, 江守陽子, 村井文江 (2010): 実習場で看護学生が受ける患者暴力を防止するための教育方法の開発. 日本看護学教育学会誌, 19 (3), 85-86.
- 中村博文, 渡辺尚子 (2012a): 精神科における臨地実習指導者の不安・困難についての分析. 精神科看護, 40 (1), 46-55.
- 中村博文, 渡辺尚子 (2012b): 精神科における臨地実習指導者の不安と自己評価に影響する要因の分析. 日本看護学会論文集: 看護教育, 42, 80-83.
- 西村多久磨, 村上達也, 櫻井茂男 (2015): 共感性を高める教育的介入プログラム介護福祉系の専門学校生を対象とした効果検証. 教育心理学研究, 63, 453-466.
- 男鹿麻里子 (2008): 新人臨床実習指導者のサポートシステムの必要性を考える. 精神看護学実習における新人臨床実習指導者が抱える困難. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 33, 163-170.
- 乙黒仁美, 藤村弥生 (2015): 患者の包布交換指導と患者使役の差異を学生が理解できなかった要因. 精神看護学実習指導における新人実習助手の戸惑いから. 日本適応看護理論研究会学術論文集, 11 (1), 1-19.
- 乙黒仁美, 藤村弥生 (2013): 看護学生役割克服から学生としての看護師役割克服を助ける臨地実習指導の本質. 精神看護学実習指導における新人実習助手の戸惑いから. 日本適応看護理論研究会学術論文集, 9 (1), 1-27.
- 乙黒仁美, 藤村弥生 (2014): 学生への患者疾病特性行動理解の期待が伝わらず混乱に陥った指導者. 日本適応看護理論研究会学術論文集, 10 (1), 1-30.
- 尾崎幸代 (2012): 文献研究から考える臨地実習指導者の抱える不安と必要な支援: 2003年から2010年の文献を対象として. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 37, 140-147.
- 小澤尚子, 原島利恵 (2015): 手術室看護師が経験した手術室実習の困難感と期待. 岩手県立大学看護学部紀要, 17, 13-23.
- 佐藤美保, 横山祐樹, 北澤典子, 岡田昌也, 吉田信子, 田野将尊, 浅沼奈美 (2016): 精神看護学実習における実習指導者と教員の連携による実習指導: 患者-学生-指導者-教員の相互関係の分析から. 杏林大学研究報告 (教養部門), 33, 21-31.
- 佐藤好子, 佐川朋美, 後藤文子, 鮎田政也, 矢澤香代子, 小貫三佳, 古谷春江, 橋井ミチ子, 岡野千代, 茂田葉月 (2004): 精神看護学実習に対する臨床実習指導者の意識. 茨城県立病院医学雑誌, 22 (2), 91-98.
- 篠田かおる, 三善郁代 (2015): 大学病院における臨地実習指導者の感じる困難とその対処行動. 愛知医科大学看護学部紀要, 14, 23-29.
- 高木薫 (2000): 臨地実習における指導者のもつ問題. 文献にみる臨地実習指導上の悩みや困難. 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, 26, 174-181.
- 手塚祐美子, 清水健史, 伊藤治幸 (2018): 新規に精神看護学実習を受け入れた病院の実習指導者の指導体験. 青森県立保健大学雑誌, 18, 9-14.
- 梅原敏行, 田上博喜, 白石裕子, 藤木翔, 猪山理加, 富松咲枝, 青石恵子 (2015): 看護学生の臨地実習を受け入れたことによる精神科訪問看護ステーションへの影響. 南九州看護研究誌, 13 (1), 21-26.
- 渡邊碧, 小高恵実, 原田尚子 (2017): 精神看護学実習における実習指導者および教員の認識と教育的支援に関する文献検討. 上智大学総合人間科学部看護学科紀要, 2, 31-43.
- 山下暢子, 中山登志子 (2015): 看護学実習中の学生が直面する問題の解明. 看護教育研究, 24 (2), 27-36.